

2018年度

慶應義塾大学入学試験問題

商 学 部

数 学

- 注 意
1. 受験番号と氏名は、解答用紙 A（マークシート）と解答用紙 B のそれぞれ所定の欄に必ず記入すること。さらに、解答用紙 A（マークシート）の受験番号欄をマークすること。
 2. 解答は、必ず指定された解答用紙の所定の欄に記入ないしマークすること。解答欄外の余白および採点欄には一切記入してはならない。
 3. 解答用紙 A（マークシート）への記入に先立って、用紙上に記載された注意事項を必ず読むこと。
 4. 試験開始後、2 ページに記載された「解答するにあたっての注意」を読んだから解答すること。
 5. 問題用紙は下書きに用いてよい。
 6. この冊子の総ページ数は 8 ページである。なお、中に計算用紙（ページ番号なし）が折り込まれている。

試験開始の合図とともに全てのページが揃っているか確認してください。ページが抜けていたり重複するページがあったら直ちに監督者に申し出てください。

《指示があるまで開かないこと》

《 解答するにあたっての注意 》

1. 問題Ⅰ (ii) (A) (B), Ⅱ (C) (D), およびⅢ (iii) の解答は**解答用紙 B** の所定の位置に記入し, それ以外の問題の解答は**解答用紙 A** (マークシート) にマークしなさい。
2. 解答が分数の場合は, 分母が正の既約分数で解答しなさい。また, 解答が根号を含む場合は, 根号の中はできる限り簡単な形にしなさい。
3. マークシートにある $\ominus$ はマイナス符号 $-$ を意味する。マークシートの記入にあたっては, 次の例を参考にしなさい。

[例 1]

(11)	(12)
------	------

 と表示のある問いに対して, 「34」と解答する場合には, 以下に示すように解答欄 (11) の ③ と解答欄 (12) の ④ にマークしなさい。

[例 2]

(13)	(14)	(15)
------	------	------

 と表示のある問いに対して, 「 -56 」と解答する場合には, 以下に示すように解答欄 (13) の $\ominus$, 解答欄 (14) の ⑤, および解答欄 (15) の ⑥ にマークしなさい。

[例 3]

(16)	(17)
(18)	(19)

 と表示のある問いに対して, 「 $-\frac{7}{89}$ 」と解答する場合には, 以下に示すように解答欄 (16) の $\ominus$, 解答欄 (17) の ⑦, 解答欄 (18) の ⑧, および解答欄 (19) の ⑨ にマークしなさい。

[例 1]

(11)	(12)
①	①
②	②
●	③
④	●
⑤	⑤
⑥	⑥
⑦	⑦
⑧	⑧
⑨	⑨
⑩	⑩
⊖	⊖

[例 2]

(13)	(14)	(15)
①	①	①
②	②	②
③	③	③
④	④	④
⑤	●	⑤
⑥	⑥	●
⑦	⑦	⑦
⑧	⑧	⑧
⑨	⑨	⑨
⑩	⑩	⑩
●	⊖	⊖

[例 3]

(16)	(17)	(18)	(19)
①	①	①	①
②	②	②	②
③	③	③	③
④	④	④	④
⑤	⑤	⑤	⑤
⑥	⑥	⑥	⑥
⑦	●	⑦	⑦
⑧	⑧	●	⑧
⑨	⑨	⑨	●
⑩	⑩	⑩	⑩
●	⊖	⊖	⊖

I. 以下の問いに答えよ。

- (i) k を 0 以上の整数とする。座標空間において、 $(x_k, 0, 0)$ を中心とする半径 r_k の球 S_k を考える。ただし、 $x_0 = 0$ であり、 $r_0 = \sqrt{5}$ とする。また、 $k = 1, 2, 3, \dots$ に対して、 S_k の中心が S_{k-1} 上にあるとし、 $x_k > x_{k-1}$ を満たすとする。

- $r_1 = \sqrt{5}$ のとき、 S_0 と S_1 が交わってできる円の円周の長さは $\sqrt{\boxed{(1)} \boxed{(2)}} \pi$ となる。
- S_0 と S_1 が交わってできる円の円周の長さが最大になるのは、 $r_1 = \sqrt{\boxed{(3)} \boxed{(4)}}$ のときである。ここで、 xy 平面上の直線 l が S_0 と S_1 のいずれとも 1 点のみを共有するとき、 l が x 軸と交わる点の座標は、 $\left(-\sqrt{\boxed{(5)}} - \sqrt{\boxed{(6)} \boxed{(7)}}, 0, 0\right)$ である。
- $k = 1, 2, 3, \dots$ に対して、 S_{k-1} と S_k が交わってできる円の円周の長さが最大となるように r_k を定める。 r_k が r_0 の 100 倍以上になるのは $k \geq \boxed{(8)} \boxed{(9)}$ のときである。

- (ii) O を原点とする座標平面上に 2 点 $A(-\sqrt{3}, \sqrt{3})$ と $B(3+\sqrt{3}, 3-\sqrt{3})$ がある。

- $|\vec{OA}|^2 = \boxed{(10)}$, $|\vec{OB}|^2 = \boxed{(11)} \boxed{(12)}$, $\vec{OA} \cdot \vec{OB} = \boxed{(13)} \boxed{(14)}$ である。
- $\vec{OC} = -2\vec{OA} - \vec{OB}$ が成り立つ点 C の座標は

$$\left(\boxed{(15)} \boxed{(16)} + \sqrt{\boxed{(17)}}, \boxed{(18)} \boxed{(19)} - \sqrt{\boxed{(20)}} \right)$$

である。

- $\vec{OA} \parallel \vec{BD}$ かつ $\vec{OB} \perp \vec{OD}$ を満たす点を D とすると、 $|\vec{BD}| = \boxed{(21)} |\vec{OA}|$ であり、このとき、 $\vec{OA} = \frac{\boxed{(22)}}{\boxed{(23)}} \vec{OC} + \frac{\boxed{(24)}}{\boxed{(25)}} \vec{OD}$ となる。

- 直線 OB と直線 CD の交点を E とすると、 $\frac{|\vec{OE}|}{|\vec{BE}|} = \frac{\boxed{(26)}}{\boxed{(27)}}$ であり、 $\vec{AE} = \frac{\boxed{(28)}}{\boxed{(29)}} \vec{DC}$ である。また、 $\triangle OAC$ の面積は $\boxed{(A)}$ であり、 $\triangle BCD$ の面積は $\boxed{(B)}$ である。

II. n を自然数, a_n, b_n を実数として, 関数 $f_n(x)$ と $g(x)$ を

$$f_n(x) = x^2 + a_n x + b_n, \quad g(x) = \frac{1}{3}x + 3$$

で定義する。また, $f_{n+1}(x)$ は関数 $g(x) \cdot f_n(x)$ の導関数であるとする。このとき, a_n と b_n は漸化式

$$a_{n+1} = \frac{\boxed{(30)}}{\boxed{(31)}} a_n + \boxed{(32)}, \quad b_{n+1} = \frac{\boxed{(33)}}{\boxed{(34)}} b_n + \boxed{(35)} a_n$$

を満たす。全ての自然数 n について $a_n > a_{n+1}$ が成り立つのは,

$$a_1 > \boxed{(36)} \cdots \textcircled{1}$$

のときである。

b_1 が 4 の倍数で, 放物線 $y = f_1(x)$ と直線 $y = g(x)$ が接しているとき, $\textcircled{1}$ を満たすような最小の a_1 は

$$a_1 = \frac{\boxed{(38)} \cdots \boxed{(39)}}{\boxed{(40)}} \cdots \textcircled{2}$$

で, このとき, b_1 は

$$b_1 = \boxed{(41)} \cdots \textcircled{3}$$

である。初項がこのように定まったとき, a_n の一般項は

$$a_n = \boxed{\hspace{2cm}} \text{(C)}$$

となる。ここで, 実数 r に対し, $[r]$ を r を超えない最大の整数とすると, $a_n - [a_n] < 0.001$ となるような最小の n は

$$n = \boxed{(43)} \cdots \boxed{(44)}$$

である。ただし, 必要であれば $\log_{10} 2 = 0.301, \log_{10} 3 = 0.477, \log_{10} 5 = 0.699, \log_{10} 7 = 0.845$ を近似として用いてもよい。

a_1 と b_1 がそれぞれ $\textcircled{2}, \textcircled{3}$ で与えられたとき, b_n の一般項は

$$b_n = \boxed{\hspace{2cm}} \text{(D)}$$

となる。

- III. ある銀行には窓口がひとつだけあり、その窓口には10時からちょうど10分おきに1人ずつ客が到着する。どの客も確率 $\frac{1}{2}$ でAの手続きを、確率 $\frac{1}{2}$ でBの手続きを行う。Aの手続きに必要な時間はちょうど5分、Bの手続きに必要な時間はちょうど15分である。

それぞれの客の手続きは、それ以前に到着した全ての客の手続きが完了すると同時に開始される。ただし、到着時に前の全ての客の手続きが完了している場合には、到着と同時に手続きが始まるものとする。

以降、窓口に着した n 人目の客を客 n と呼び、ある客が窓口に着してから手続きが始まるまでの時間をその客の待ち時間と呼ぶ。例えば、客1から客10が順に ABBBAAAABA の手続きを行ったとき、それぞれの客の到着時刻、手続きの開始・終了時刻、待ち時間は下表の通りとなる。

客	到着	開始	終了	待ち時間	客	到着	開始	終了	待ち時間
1	10:00	10:00	10:05	0分	6	10:50	11:00	11:05	10分
2	10:10	10:10	10:25	0分	7	11:00	11:05	11:10	5分
3	10:20	10:25	10:40	5分	8	11:10	11:10	11:15	0分
4	10:30	10:40	10:55	10分	9	11:20	11:20	11:35	0分
5	10:40	10:55	11:00	15分	10	11:30	11:35	11:40	5分

ここで、客 n の待ち時間が x 分となる確率を $W(n, x)$ とおく。

以下の設問において $\boxed{(99)}$ や $\boxed{(\sim)}$ が2度以上現れる場合には、2度目以降はそれぞれ $\boxed{(99)}$, $\boxed{(\sim)}$ のように破線で表記することにする。

- (i) 客1の手続きは必ず10時に始まるため、 $W(1, 0) = 1$ である。また、客1の行う手続きによって客2の待ち時間が変わるので、 $W(2, 0) = W(2, 5) = \frac{1}{2}$ となる。同様に考えて、 $W(3, \boxed{(45)}) = \frac{1}{2}$, $W(3, \boxed{(46)}) = W(3, \boxed{(47)} \text{ } \boxed{(48)}) = \frac{1}{4}$,
 $W(4, \boxed{(49)}) = W(4, \boxed{(50)}) = \frac{\boxed{(51)}}{\boxed{(52)}}$, $W(4, \boxed{(53)} \text{ } \boxed{(54)}) = W(4, \boxed{(55)} \text{ } \boxed{(56)}) =$
 $\frac{\boxed{(57)}}{\boxed{(58)}}$ となる。

以下, n を 2 以上の自然数, t を整数としたとき, $0 \leq t \leq n-1$ ならば,

$$W(n, 5t) = \begin{cases} \frac{1}{2^{n-1}} \cdot {}_{n-1}C_{\frac{n+t-1}{2}} & n+t \text{ が奇数のとき} \\ \frac{1}{2^{n-1}} \cdot {}_{n-1}C_{\frac{n+t}{2}} & n+t \text{ が偶数のとき} \end{cases} \quad \dots \textcircled{4}$$

が成り立つことを n に関する数学的帰納法で証明する。

- (ii) 空欄 (59) ～ (77) に当てはまる最も適切な式を下の選択肢から選び, その番号を解答用紙 A (マークシート) の所定の欄にマークしなさい。

- | | | | |
|----------|--------|----------|----------|
| 1. $k+1$ | 2. k | 3. $k-1$ | 4. $k-2$ |
| 5. $t+1$ | 6. t | 7. $t-1$ | 8. $t-2$ |

$n=2$ のとき, $W(2, 0) = W(2, 5) = \frac{1}{2}$ であったので, ④ は $t=0, 1$ に対して成り立つ。以降, $k \geq 2$ とし, $n=k$ のときに $0 \leq t \leq n-1$ ならば ④ が成り立つと仮定し, $n=k+1$ のときを考える。

$W(k+1, 5k)$ は客 k が $5(k-1)$ 分待った後に B の手続きを行う確率と等しいので,

$$W(k+1, 5k) = W(k, 5(k-1)) \times \frac{1}{2} = \frac{1}{2^{\frac{(59)}{2}}} \cdot {}_{k-1}C_{\frac{k+\frac{(60)}{2}-1}{2}} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{2^{\frac{(61)}{2}}} \cdot {}_kC_{\frac{(62)}{2}}$$

となり, ④ は $t=k$ のとき成り立つ。同様に

$$W(k+1, 5(k-1)) = W(k, 5\frac{(63)}{2}) \times \frac{1}{2} = \frac{1}{2^{\frac{(59)}{2}}} \cdot {}_{k-1}C_{\frac{k+\frac{(64)}{2}}{2}} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{2^{\frac{(61)}{2}}} \cdot {}_kC_{\frac{(65)}{2}}$$

となり, ④ は $t=k-1$ のとき成り立つ。

$1 \leq t \leq k-2$ のとき, $W(k+1, 5t)$ は客 k が $5\frac{(66)}{2}$ 分待った後に A の手続きを行う確率と, 客 k が $5\frac{(67)}{2}$ 分待った後に B の手続きを行う確率の和なので,

$$W(k+1, 5t) = W(k, 5\frac{(66)}{2}) \times \frac{1}{2} + W(k, 5\frac{(67)}{2}) \times \frac{1}{2} \quad \dots \textcircled{5}$$

となる。 $k+1+t$ が奇数のとき,

$$W(k, 5\frac{(66)}{2}) = \frac{1}{2^{\frac{(59)}{2}}} \cdot {}_{k-1}C_{\frac{k+\frac{(68)}{2}-1}{2}}, \quad W(k, 5\frac{(67)}{2}) = \frac{1}{2^{\frac{(59)}{2}}} \cdot {}_{k-1}C_{\frac{k+\frac{(69)}{2}-1}{2}}$$

なので, ⑤ より

$$W(k+1, 5t) = \frac{1}{2^{\frac{(61)}{2}}} \left({}_{k-1}C_{\frac{k+\frac{(70)}{2}}{2}} + {}_{k-1}C_{\frac{k+\frac{(70)}{2}-1}{2}} \right) = \frac{1}{2^{\frac{(61)}{2}}} \cdot \frac{(71)}{2} C_{\frac{k+\frac{(72)}{2}}{2}}$$

となり、 $k+1+t$ が偶数のとき、

$$W(k, 5(\overline{(66)})) = \frac{1}{2^{\overline{(59)}}} \cdot {}^{k-1}C_{\frac{k+\overline{(73)}}{2}}, \quad W(k, 5(\overline{(67)})) = \frac{1}{2^{\overline{(59)}}} \cdot {}^{k-1}C_{\frac{k+\overline{(74)}}{2}}$$

なので、⑤より

$$W(k+1, 5t) = \frac{1}{2^{\overline{(61)}}} \left({}^{k-1}C_{\frac{k+\overline{(75)}}{2}} + {}^{k-1}C_{\frac{k+\overline{(75)}}{2}-1} \right) = \frac{1}{2^{\overline{(61)}}} \cdot \overline{(76)} C_{\frac{k+\overline{(77)}}{2}}$$

となる。したがって、④は $1 \leq t \leq k-2$ のとき成り立つ。

- (iii) (ii)の文章にならい、空欄(ア)～(シ)に入る最も適切な式を解答用紙Bの所定の欄に記述しなさい。

$W(k+1, 0)$ は客 k が5分待った後にAの手続きを行う確率と客 k が待ち時間なくAの手続きを行う確率の和なので、

$$W(k+1, 0) = W(k, 5) \times \frac{1}{2} + W(k, 0) \times \frac{1}{2} \quad \dots \text{⑥}$$

となる。 $k+1$ が奇数のとき、④より

$$W(k, 5) = \frac{1}{2^{\overline{(59)}}} \cdot \overline{(ア)} C_{\overline{(イ)}}, \quad W(k, 0) = \frac{1}{2^{\overline{(59)}}} \cdot \overline{(ウ)} C_{\overline{(エ)}}$$

であるが、一般に $p \geq q \geq 0$ を満たす整数 p, q に対して ${}_pC_q = {}_pC_{\overline{(エ)}}$ が成り立つことに注意すると、⑥より

$$W(k+1, 0) = \frac{1}{2^{\overline{(61)}}} \left(\overline{(ウ)} C_{\overline{(オ)}} + \overline{(ウ)} C_{\overline{(オ)}} - 1 \right) = \frac{1}{2^{\overline{(61)}}} \cdot \overline{(カ)} C_{\overline{(キ)}}$$

となる。また、 $k+1$ が偶数のとき、

$$W(k, 5) = \frac{1}{2^{\overline{(59)}}} \cdot \overline{(ウ)} C_{\overline{(ク)}}, \quad W(k, 0) = \frac{1}{2^{\overline{(59)}}} \cdot \overline{(ウ)} C_{\overline{(ケ)}}$$

なので、⑥より

$$W(k+1, 0) = \frac{1}{2^{\overline{(61)}}} \left(\overline{(ウ)} C_{\overline{(コ)}} + \overline{(ウ)} C_{\overline{(コ)}} - 1 \right) = \frac{1}{2^{\overline{(61)}}} \cdot \overline{(カ)} C_{\overline{(サ)}}$$

となる。したがって、④は $\overline{(シ)}$ のとき成り立つ。

以上より、任意の2以上の自然数 n に対して $0 \leq t \leq n-1$ ならば④が成り立つことが示された。

《 以下余白 》